

ふく びくう えん  
**副鼻腔炎**



ひしむら耳鼻咽喉科・アレルギー科

菱村 祐介



鼻の代表的な病気といえば、アレルギー性鼻炎、もうひとつメジャーなもので、副鼻腔炎があります。

# 副鼻腔炎とは

～ いわゆる、蓄膿症

ウイルスによる上気道感染(いわゆる、風邪)

その後の膿まじり、粘り気のある鼻水



長引く風邪？

→ 副鼻腔炎(蓄膿症)かもしれない??

副鼻腔炎という言葉になじみのない方々が多いと思います。世間一般ではいわゆる蓄膿ないし蓄膿症と呼ばれている病気と同じものです。

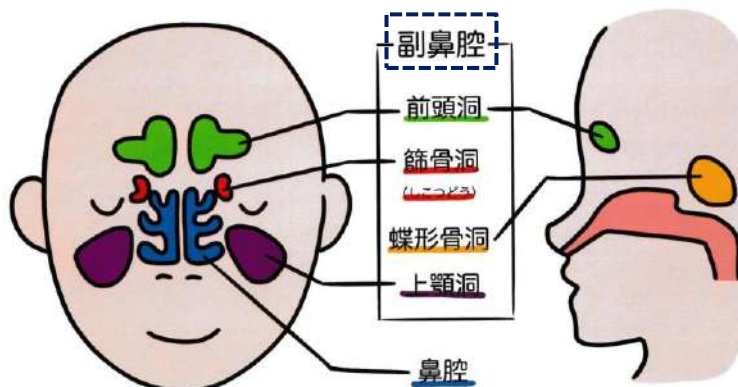
ウイルスによる上気道感染 いわゆる風邪のことです。風邪をひいた後に、膿混じり、粘り気のある鼻水が続くことがあると思います。

長引く風邪？もしかしたら、それは副鼻腔炎(蓄膿症)かもしれません。

# フクビクウ

**ドコ** 鼻の中(鼻腔)の奥、狭い通路で続く洞穴  
上顎洞、篩骨洞、前頭洞、蝶形骨洞

**役割** 鼻呼吸にて、肺に入る空気の加温加湿



そもそも フクビクウとは？どこにあるか、その役割についてお話します。

フクビクウは、みなさんが想像する鼻の中(鼻腔 青色エリア)よりも奥の方に存在します。

狭い通路でいくつかに分かれてく 洞穴をイメージしてもらえるとわかりやすいと思います。

頬のところが一番大きな洞穴、紫色エリアが上顎洞、鼻の奥から眼の横にかけての赤色エリアが篩骨洞、おでこ、ひたいのみどり色エリアには前頭洞が、そして一番奥、脳のすぐ下のオレンジ色エリアに蝶形骨洞があります。

これら4つの名称の洞窟を総称してフクビクウ(=副鼻腔)と呼びます。

役割は、鼻呼吸の際に、肺に入る空気の加温加湿を行っています。

# 副鼻腔炎てどんな病気？

## 鼻炎



くしゃみ



鼻汁



鼻づまり

## 副鼻腔炎



粘性・膿性鼻汁、鼻づまり、嗅覚障害、頭痛、顔面痛、歯痛、後鼻漏、咳 などなど

多彩な症状

急性 = 急性副鼻腔炎

1か月以内

鼻炎と副鼻腔炎の症状は似通っております。鼻炎の主な症状はくしゃみ、鼻汁、鼻づまりです。

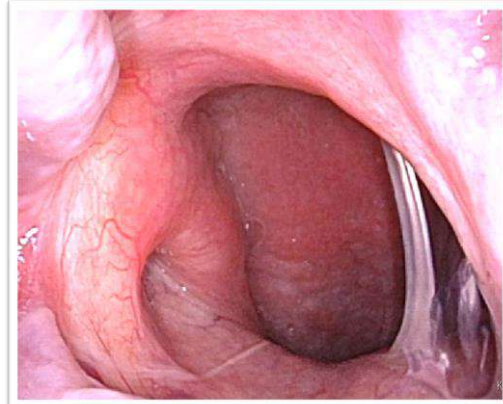
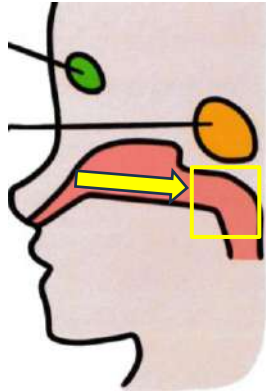
副鼻腔炎では、粘性・膿性の色のついた嫌なにおいのある鼻汁、鼻づまりの悪化、匂いがおちる、匂いがしなくなる嗅覚障害、頭痛、顔面の痛み、上あごの歯の痛み、後鼻漏という鼻水がのどに落ちてひっかかり、のどがいがいがすること、そして、たんがらみの咳など、多彩な症状があらわれます。

症状がでて、1か月以内のものを急性副鼻腔炎といいます。

鼻風邪がこじれて、膿のようなにおいのある鼻汁に変化したり、ごらんのような症状を呈した場合は、急性副鼻腔炎の可能性がります。

# 急性副鼻腔炎

鼻風邪症状が2週間以上持続。鼻漏、痰がらみの咳、後鼻漏



内視鏡像

こちらは急性副鼻腔炎例です。鼻風邪症状(鼻漏、痰がらみの咳、後鼻漏)が、2週間以上持続。

鼻の中の写真の一例です。絵の黄色い四角囲みの部分を鼻の入り口から内視鏡カメラをいれて、奥を観察したものが右の内視鏡写真です。

鼻水が鼻の奥からのどに落ちております。

# 慢性副鼻腔炎

鼻炎



くしゃみ



鼻汁



鼻づまり

副鼻腔炎



粘性・膿性鼻汁、鼻づまり、嗅覚障害、頭痛、顔面痛、歯痛、後鼻漏、咳

急性

1カ月以内



慢性

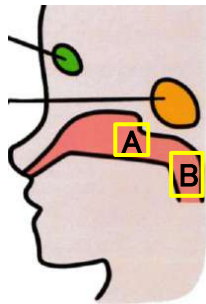
3カ月以上

約200万人

さらに、副鼻腔炎症状がもっと長くなる場合もあります。具体的に3カ月以上続くものを慢性副鼻腔炎といいます。

慢性副鼻腔炎の患者は、国内におよそ200万人いるとの報告もあり、昔より減ったとはいえ、まだまだけっして少なくない病気です。

# 内視鏡検査



写真A



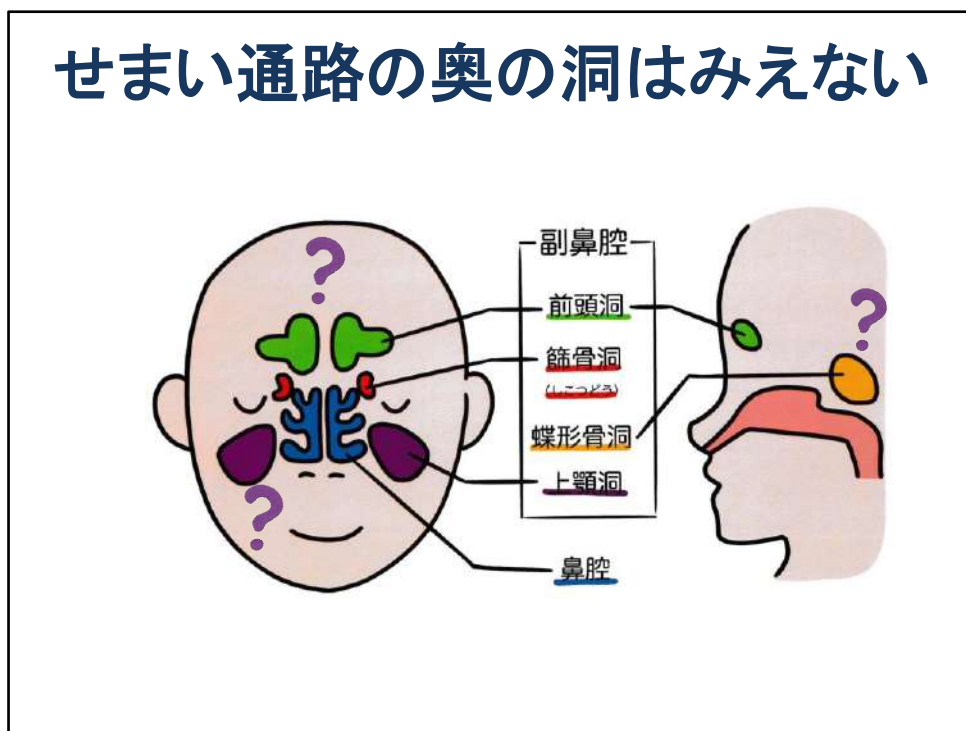
写真B

診断には内視鏡検査が有用です。

写真A: 膿性の鼻漏があります。

写真B: のどの方へと流れる様子もあり、これが後鼻漏です。咳や痰の症状を来たします。

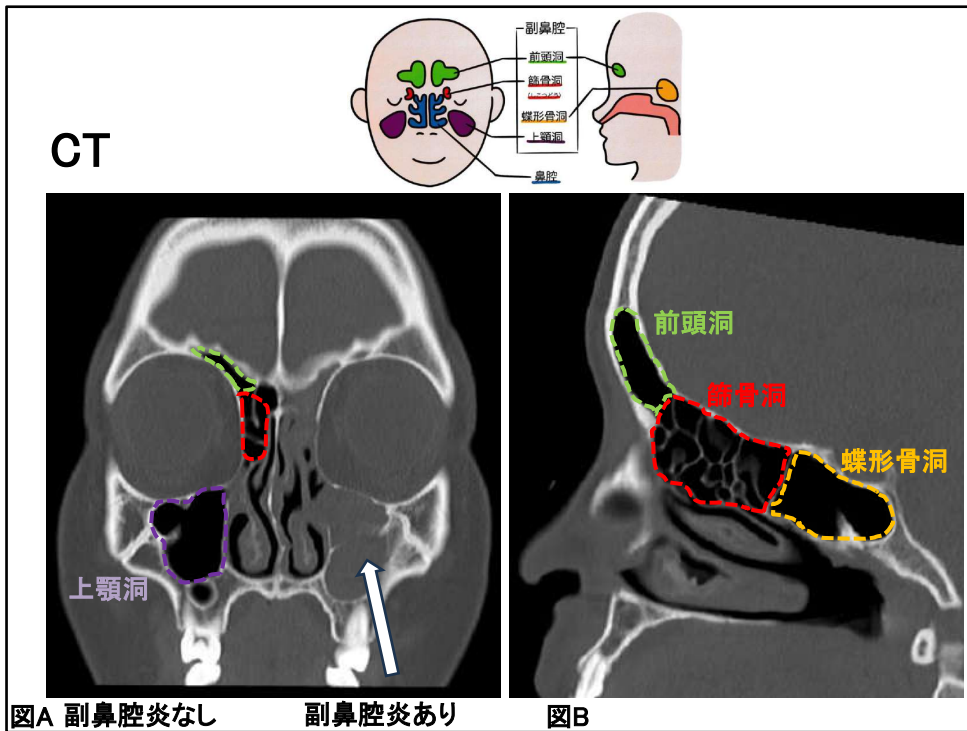
## せまい通路の奥の洞はみえない



しかし内視鏡検査の限界もあり、狭い通路のさらに奥の副鼻腔内の詳細な観察は困難です。

紫色エリアの上顎洞や緑色エリアの前頭洞、そしてオレンジ色エリアの蝶形骨洞はよくみえません。

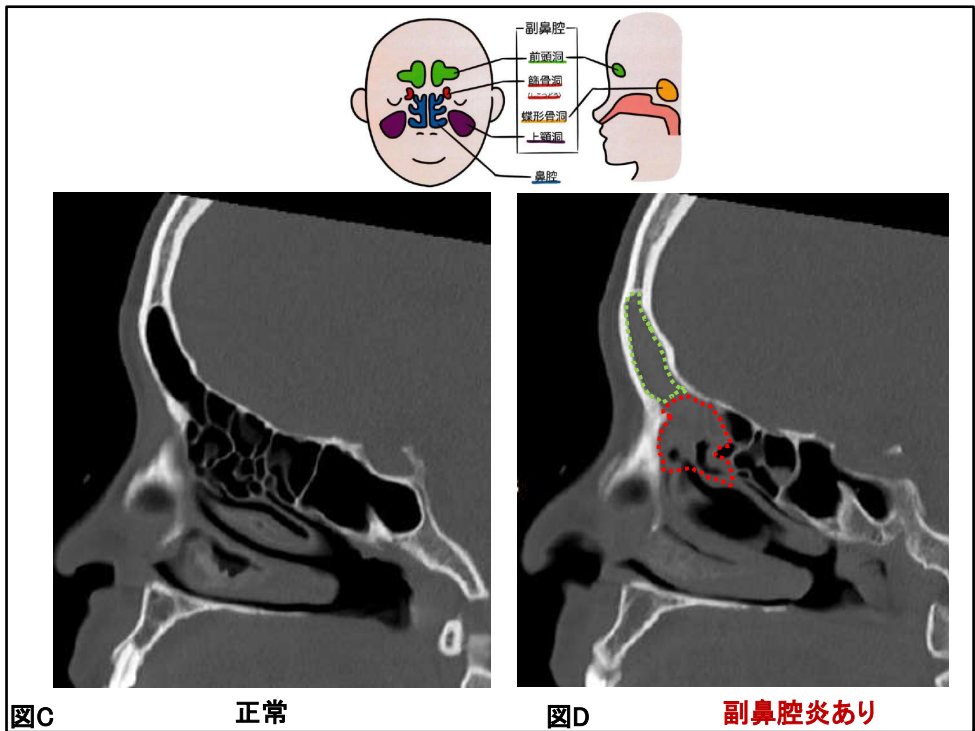




そこで、副鼻腔洞内の状態を把握するために、さらに画像検査を行うことがあります。副鼻腔炎には様々な原因のものもあり、また手術治療の適応を選択するためにもCT検査が有用です。

図A:CTにて副鼻腔はこのように映ります。画面右側に副鼻腔炎を認めます(後述)。緑色おでこのあたりの副鼻腔が前頭洞、赤色の目と目の間に篩骨洞、紫色の頬の副鼻腔が上顎洞です。

図B:オレンジ色、一番後方の副鼻腔が蝶形骨洞となります。



こちらは正常と副鼻腔炎のある側との比較です。

図C: 正常ですと副鼻腔内には空気が入って、すっきり黒くみえます。

図D: 副鼻腔炎ではグレーに曇ります。赤色部分 篩骨洞から緑色部分 前頭洞にかけて曇ってうつっている、つまり副鼻腔炎になっていることが確認されます。

以上のような診察を経て、副鼻腔炎と診断され、治療にすすみます。

# 治療

局所治療

薬物療法

手術療法

治療です。大別して局所治療、薬物療法、手術療法があります。

# 局所治療

**鼻処置**  
(鼻汁の除去)



**ネブライザー**  
(吸入器療法)



**鼻洗浄**



まず局所治療です。鼻処置(鼻汁の除去)後に、ネブライザー療法を行います。ネブライザー療法とは、写真のようなノズルやマスクを鼻にあて、薬の入った蒸気エアロゾルを吸入して、副鼻腔内へ薬を送ります。

次に鼻洗浄です。特に後鼻漏症状が強いときは、おすすめの治療です。自宅で鼻洗浄を行なっていただきます。鼻水などの粘液やほこり・花粉などのアレルゲンの除去、線毛機能の改善や粘膜の保護においても有益です。

専用の器具を使い、鼻がツーンとしないよう調整した塩水で洗い流していただきます。最初は恐怖感があるかたもいらっしゃいますが、なれてくると、朝や入浴時の洗顔に近い感覚で行えるようになります。

# 薬物療法

急性副鼻腔炎      抗菌薬

慢性副鼻腔炎      マクロライド療法

さらに、              粘液溶解薬



薬物療法です。急性副鼻腔炎の時は、抗菌薬治療を中心に加療。  
慢性副鼻腔炎の場合は、マクロライド療法という3カ月ほど通常よりも少ない量の抗菌薬、いわゆる抗生物質を内服していただいたり、粘液溶解薬(カルボシステインなど)を使用します。

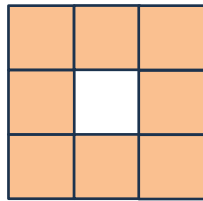
# 手術療法

## 内視鏡下鼻副鼻腔手術 endoscopic sinus surgery: ESS

治療で十分な症状改善が得られない場合は、手術療法を検討します。  
手術は、内視鏡下鼻副鼻腔手術という内視鏡で行う手術です。体の外を傷つけることなく、鼻の中のみでの機械操作にて行われます。  
手術治療を検討される場合は、手術可能な施設へご紹介させていただきます。

# 内視鏡下鼻副鼻腔手術



-  副鼻腔、粘膜炎症(隔壁のある小部屋)
-  換気のある空間(鼻腔)

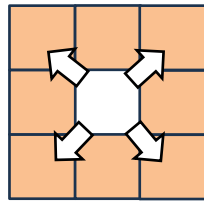


手術のイメージです。

副鼻腔粘膜の炎症のある副鼻腔をオレンジの仕切りの有る小部屋に、換気のある空間を鼻腔に見立てています。

# 内視鏡下鼻副鼻腔手術

-  副鼻腔、粘膜炎症(隔壁のある小部屋)
-  換気のある空間(鼻腔)





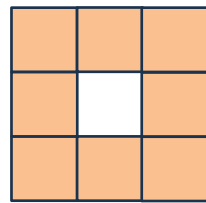
白い空間を広げたい

この白い空間を広げる方法を考えます。

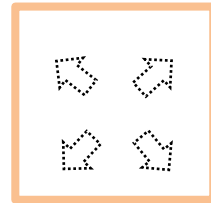


# 内視鏡下鼻副鼻腔手術

-  副鼻腔、粘膜炎症(隔壁のある小部屋)
-  換気のある空間(鼻腔)



手術療法



換気良好な広い  
ひとつの大部屋に

手術により、このオレンジの部屋のしきりや壁を取り除くことで、狭い部屋を広いひとつの大部屋にするイメージです。

広い空間にすることで、換気をよくし、貯まる鼻汁の排泄もつけやすくなります。以上が手術療法の簡単な説明です。

# 予防法

局所治療

鼻かみ



片方ずつそっとかむ

鼻処置

鼻洗淨



薬物療法



点鼻薬



服薬

副鼻腔炎にはまたかかることもあります。

なるべく副鼻腔炎にならないための具体的な予防法についてお話しします。

自覚症状の緩和や病気のコントロールのために、局所治療は有効です。

鼻かみ、実はこの絵のように両鼻を抑えて強くかむのは誤りです。空気圧で耳を悪くする危険があることや、鼻の血管を傷つけて鼻血がでることがあります。

正しい鼻のかみかたは、片方の鼻ずつそっとかんでください。鼻かみの上手くできないこどもは鼻吸いを行います。

さらに鼻処置、鼻洗淨を行います。それでも十分な症状改善が得られなければ、薬物療法を行います。

# 不快な症状を治すために

ネバネバした色のついた鼻水

鼻水がのどにおちる。痰？

臭いが鈍くなる

鼻づまり

頭が重く痛い



**副鼻腔炎  
かもしれない**

ぜひ、当院へご相談下さい

以上、副鼻腔炎についてお話をさせていただきました。  
鼻の症状でこのような症状があれば、副鼻腔炎かもしれません。  
不快な症状を治すために、ぜひお気軽に当院へご相談下さい。